

書評

鈴木貴之著

『ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろう——意識のハード・プロブレムに挑む』

(勁草書房、2015年)⁽¹⁾

薄井尚樹

1. 本書のあらまし

意識は私たちの生活にとっても深く根づいたものだけれど、他方で（あるいは、だからこそ）意識は多面的なものでもある。心の状態を言語的に報告することや、行動を意図的にコントロールすることといった、さまざまな現象に意識はあらわれる。その大半については（いずれ）科学的な説明が与えられることになるだろう。たとえば、報告機能を担う神経メカニズムが特定可能だと考えることに問題はなさそうだ。しかしそういった説明では尽くされないように思われる側面が、意識にはある。それが、トマトを見るときに私たちが気づく赤さのような、意識経験にともなう独特の感じクオリア (qualia) 一だ。特定の神経メカニズムとともに、この感じがあらわれたりあらわれなかったりするのなぜだろうか。思考可能性論証 (Chalmers, 1996) や知識論証 (Jackson, 1982) といった議論は、哲学的ゾンビや白黒の部屋のメアリーとして知られる有名な思考実験をもとに、この問いが原理的に解決不可能ではないかと示唆する。つまり、神経メカニズムがどれだけ詳細にわかろうとも、それと意識経験のあいだで「相関が成り立つ理由」(p. 261) は明らかにならない、というわけだ。そうだとすると、意識には自然科学の枠組みから逸脱した側面があることになるだろう。この問いはいま見たように、ときに解決不可能なものとして提示されることから、「意識のハード・プロブレム (hard problem of consciousness)」(Chalmers, 1996) と呼ばれ、おおくの研究者の関心の的となってきた⁽²⁾。

本書はこの意識をめぐる問いを主題とするものであり、その役割はおおきくふたつに区分される。ひとつは、あとがきで述べられているように「意識の問題にかんする中級入門書」(p. 275)として、

そこで提案されている主要な立場を整理するという役割だ (第1章から第4章)。この役割において本書は、アンチ物理主義、新神秘主義、タイプB物理主義、およびいくつかのタイプの意識の表象理論 (一階の表象理論、高階思考理論、高階知覚理論) を、フローチャート形式で明快に整理している。これから意識の問題を学びたい読者 (わたしもまたそのひとりだ) は、このフローチャートをひとつずつ追っていくことで、そこでの立場の違いを把握できるだろう⁽³⁾。またこの分野では、さまざまな専門用語や立場の細かな区別があらわれるにもかかわらず、論者ごとにその意味あい微妙に異なることがしばしばある。このことが意識の問題を学ぶための敷居を高くする一因となってきたが、本書は巻末の用語説明で用語の意味を明確にしておき、読者に不要な混乱をもたらさないよう配慮されている。

さて、このようにしてさまざまな立場を検討したうえで最後にたどりつくのがミニマルな表象理論 (minimal representationalism: 以下では「MR」と略す) であり、その立場の妥当性を示すことが本書のもうひとつの役割となる (第5章から第7章)。本書の冒頭に掲げられた、シャーロック・ホームズの有名な消去法的推理のセリフが示唆するように、この立場は、それ以外の立場を網羅的に検討・批判したうえで最終的にたどりつくというかたちで論じられる。このことは、全体像をつかむための教科書として本書を優れたものとする一方で、MRという立場そのものを (たんなる消去法の結果ではなく) 積極的に支持するためにどのような議論がなされているのかを見えにくくしかねない。次節でごく簡単にその構造を示すことにしよう。

2. ミニマルな表象理論

おおくの意識の表象理論とおなじように、MRの出発点となるのは「経験の透明性 (transparency of experience)」と呼ばれる現象学的なデータ (p. 65; e.g. Harman, 1990) だ。あなたが赤いトマトを見ているとしよう。ここで、どれだけその意識経験それじたいに注意を向けようとしても、経験そのものにそなわる (その経験に内在的な) 性

質があらわれることはないように思われる。経験それじたいは透明で、どれだけそこに注意を向けようとしても、注意はそれを乗り越えて世界に向かってしまうのだ。これが経験の「透明性」が意味するところだ。そしてこういった透明性が成り立つとすれば、私たちの意識経験の内容は（クオリアも含めて）それが表象するもの、つまりその志向的内容によって尽くされると考えるのがもっともらしい。それゆえ「クオリアとは、意識経験そのものの性質ではなく、意識経験の志向的対象の性質である」（pp. 64-65）という、クオリアにかんする志向説（intentionalism）が主張されることになる⁽⁴⁾。この主張によると、たとえばトマトを眺めるときに私たちが気づく赤さは、経験によって表象される対象（志向的対象）の性質であって、経験それじたいの性質ではないとされる。これが意識の表象理論（そしてMR）の基本アイデアだ⁽⁵⁾。このように、意識経験それじたいの特徴ではなく、その志向的対象の性質に注目する点で、クオリアの志向説は意識のハード・プロブレムに独自の切り口を示すものだと言えよう。

クオリアにかんする志向説の魅力は、それによって「意識を自然化する道が開ける」（p. 65）という点にある。クオリアにかんする志向説が述べるように、意識経験とは表象にほかならず、クオリアはそこで表象される対象の性質（志向的対象の性質）なのだとしてみよう。すると、表象のしくみを自然科学の枠組みのもとで説明できるとすれば、それにともなって、特定の神経メカニズムと特定の意識経験のあいだに相関が成り立つのはなぜかという問い、つまり意識のハード・プロブレムに、自然科学の枠組みから答えを与える見込みが立つはずだ。

したがって求められるのは、表象の理論として自然科学の枠組みのもとで理解可能で、また意識経験を（たとえば絵画のような）他の種類の表象から適切に区別できるようなものである。そしてそういった理論を定式化するさいに、MRは他のタイプの意識の表象理論から分かれることになる（第5章）。簡単に見てみよう。

本書では意識経験というものを、別の表象を紹介することなくなにかを表象することのできる「本

来的表象」として特徴づけて、それによって絵画などの他の種類の表象から区別する。このような本来的表象をもつ生物は、そのおかげでまわりの環境に柔軟に反応できるようになる。つまり、感覚器官への直接的な刺激だけに頼って行動するばあいとちがって、そういった刺激を、世界をあらわす別の内部状態（本来的表象）に変換できる生物は、それに依拠して「自分自身と離れた世界のあり方に応じて、行動を変えることができる」（p. 133）のである。このように「本来的表象の本質的な役割は、遠位の事物にたいする適切な行動を可能にすること」（p. 141）にあり、そのことは生物の生存におおきく貢献する。というのも本来的表象をもつ生物は、近位的な刺激だけに頼る生物とちがって、たとえば遠く離れた捕食者からいち早く逃げることができるからだ。

このことから、本来的表象の志向的内容について次のような主張がなされる。いま見たように、本来的表象の役割は適切な行動と結びつくことでその生物の生存に有利にはたらくことだ。このことと、生物には有限の認知能力しかないことをあわせてふまえると、この表象は対象の物理的性質を正確に再現する必要はないはずだ。つまり、生物のかぎられた表象システムに相対的に、その生存に貢献するかぎり、まわりの事物を分類できれば十分なのだ。それゆえ「本来的表象は、世界をありのままに写し取ることを目的とするのではなく、みずからの生存にとって有用な仕方では世界を分節化することを目的とする」（p. 142）のだとされる。本来的な表象の理論によると、表象としての意識経験は、それを有する「生物の視点」（p. 158）から、言い換えれば主体中心的に特徴づけられることになるのである。

このようなかたちで「クオリアにかんする志向説と、自然主義的な本来的表象の理論」（p. 154）をつうじてもたらされる「本来的な表象は意識経験である」（p. 158）という考えかたこそがMRである。

この立場はクオリアのステータスについて重要な主張をおこなう（第6章）。クオリアにかんする志向説が正しいとすれば、クオリアとは経験そのものの性質ではなく、その経験によって表象さ

れる対象の性質だ。しかし先に見たように、本来の表象は対象の物理的性質を忠実に再現するわけではない。だとすれば、それはなにを表象しているのだろうか。言い換えると、本来の表象をとまなつてまわりの環境と対峙する生物は、対象のどのような性質を経験しているのだろうか。それについて本書が与える答えはこうだ。すなわち、本来の表象によって「世界をある仕方では分節化し、それにもとづいて行動するとき、その生物は、対象の物理的な性質には還元不可能な性質を経験する」(p. 178: 強調引用者) ののである。

本書によると、この主張は物理主義(「この世界に存在するものは、すべて自然科学的な枠組みのもとで理解できるという考え方」(p. 264))の放棄を意味するわけではない。表象される性質が物理的性質に還元できないもののだとしても、そのような性質そのものは物理主義の枠組みのなかにおさまらうものなのだ。本書は先の引用に続けてつぎのように述べる。

物理的性質を持つ事物からなる環境のなかには、本来の表象をもつ生物が存在するという、それ自体としては物理主義的に理解可能な事態が成立することによって、物理的性質に還元不可能な性質が、物理的世界の新たな構成要素となるのだ (p. 178)

このようにして「物理的な世界には、経験される性質という、物理的性質に還元不可能な性質も含まれる」(pp. 178-179) ことになるのである。

以上が、MRがクオリアをめぐる問いにどう答えるかについての、ごく簡単な概略だ。実際にはさらに緻密な議論がおこなわれており、また第7章では知識論証への応答が試みられている。本稿では触れることができないが、盲視・腹側経路損傷・プライミングについての科学的知見とMRとの整合性を検討する箇所 (pp. 162-166)、および本書で展開される本来の表象の理論にそくして知覚と思考を区別し、その区別のもとで知識論証を検討する箇所 (pp. 204-214) は、本書の白眉と言ふべきもので、この哲学と科学が交差する地点においてなされる議論はきわめてスリリングなもの

だ。とはいえ残念ながら紙幅にかぎりがあるので、次節では、いま概略を述べたかぎりでのMRの構造に焦点を与えることにしよう。

3. ミニマルな表象理論は投射説の一種なのか

本節では、MRを「投射説 (projectivism)」と呼ばれる立場と比較することで、意識の理論としてのMRの位置づけを検討したい。そのためにまず、MRとあるタイプの投射説の共通点を考察し、そのうえでMRがそういったタイプの投射説とは別個の立場として提案されるのだとすれば、どのような問いに答えなくてはならないかを示すことにしよう。

3.1

まず投射説とはどのような立場なのか。それを理解するうえでは、Shoemaker (1994) による、文字通りの投射説 (literal projectivism) と比喩的な投射説 (figurative projectivism) の区別に目を向けることが有用だ⁽⁶⁾。

色の経験は対象の物理的性質を表象するのだと主張するタイプの表象理論を考えてみよう。この立場からすると、色性質は表面反射特性のような物理的性質と同定されなくてはならないだろう。投射説はそういった立場とは対照的だ。というのも投射説は、それが文字通りのものであれ比喩的なものであれ、対象の物理的性質と、経験によって表象される性質とのあいだにギャップを認めるからだ。ここで文字通りの投射説と比喩的な投射説の違いをつぎのように説明できる。一方で文字通りの投射説によると、経験によって表象される色性質とは、実際には経験(主体)そのものにそなわっている性質を、対象に投射したものだといわれる (e.g., Boghossian & Velleman, 1989)。他方で比喩的な投射説によると、それは、対象には実際には例化されていない性質を、その対象に誤って大規模かつ体系的に表象したものだといわれる (e.g., Seager & Bourget, 2007; Wright, 2003)。

本稿の論旨にとって重要なのは比喩的な投射説(以下では「FP」と略す)のほうだ。それによると、意識経験によって表象される色性質は、実際には雑多な物理的性質の寄せ集めをトラッキングして

いるにすぎない (e.g., Wright, 2003, p.525)。それはなにか特定の物理的性質とタイプ同一ではないのである。それゆえ、たとえば赤さはこの世界で現実に例化されることのない、いわば「志向的内容のなかでしか生きられない」(Shoemaker, 1994, p. 26) 性質だとされる。おなじような主張は、色性質だけでなく、情動や雰囲気における感情的な性質についてもなされる (Mendelovici, 2014)。このようにして意識経験が現実には存在しない性質を表象することは、生物としての制約から生じるものだけれど有益でもある。たとえば現実には存在しない色性質を表象することは、それを識別することで捕食者から逃れる行動ができるというように、生物の生存に貢献するとされるからだ (e.g., Wright, 2003, pp. 527-529)。

以上をふまえるとMRはFPによく似た立場だと言えよう。というのも、このふたつの立場は以下の3つの主張を共有するからだ。

- (1) クオリアにかんする志向説：意識経験の内容は志向的内容によって尽くされる。そしてクオリアとされるものは意識経験によって表象される対象の性質にほかならない。
- (2) 表象としての意識経験についての主体中心的特徴づけ：表象としての意識経験の本質的な役割は、生物の生存に貢献する行動を可能にすることにある。それゆえ志向的内容はこの観点から、その生物の表象システムと相対的に定まる。
- (3) ギャップの受容：対象の物理的性質と、意識経験によって表象されるその性質(クオリア)とのあいだにはギャップがある。

先に述べたように、(1)は、意識の表象理論の基本アイデアにほかならない。ここでFPも(1)をちゃんと満たすことに注意しよう。この立場によると、たとえば色性質は志向的对象の性質として表象されるものだが、現実にはこの世界では(たまたま)例化されていないのである。そして(2)は本書において「本来的表象の理論」として提案されるものであり、それによると、意識経験は世界を忠実に再現するわけではなく、生物の関心に

応じた分類をする表象だとみなされることになる。そして先に見たようにFPもまた、意識経験についておなじように主体中心的な説明をおこなう。(3)は(1)と(2)からもたらされるもので、それによってMRとFPは、他のタイプの表象理論から、たとえば色性質を対象の表面反射特性と同定しようとする立場から、区別されることになるのである。

3.2

それではMRとFPの違いはどこにあるのだろうか。ひとつの違いは正しい表象と誤った表象の区別にある。つまりこうだ。先に見たように、FPは(3)をもとに、本来的表象は対象の性質を誤って、しかも大規模かつ体系的に表象しているのだと主張する。他方でMRは、(3)が本来的表象の正しさにとって本質的ではないと主張する。というのも、本来的表象の目的はそもそも対象の物理的性質を忠実に再現することにはないからだ。

それではMRは、ある表象が正しい表象であるか、それとも誤った表象であるかをどのように説明するのだろうか。本書ではふたつの基準が提案されている。ひとつは客観性に訴える基準だ。それによると正しい表象とは、ある主体がある特定の事物についておなじ内容の意識経験をくりかえしもつことができたり (p. 150)、おなじタイプの表象システムをもつ主体すべてが特定の事物についておなじ内容の意識経験をもつことができたりする (p. 177) 点で、認識の一貫性がともなうとされる。そしてもうひとつは「より適応的な行動を可能にする別の表象が存在すること」(p. 153)を誤表象の条件とするものだ。これらふたつの条件が適切に満たされているかぎり、物理的性質と志向的对象の性質とのあいだにギャップがあるとしても、本来的表象は物理的性質とは別の、それには還元不可能な性質を正しく表象しているとされるのである。

一見するとMRとFPの違いは、ただの言葉づかいの問題でしかない。たとえば色について考えてみると、FPはそれが概念的に不整合だと主張するわけではないし、色についての日常的な語りがある意味では正当なものであることも否定しな

い (e.g., Wright, 2003, p. 524)。そしてその理由として、私たちがだいたいおなじ知覚装置をもっていることや生物の生存に貢献することが、(色のばあいにかぎらず) 挙げられるのである (e.g., Mendelovici, 2014, p. 152; Wright, 2003, p. 524)。さらにここで、意識経験がなにか「独自の (*sui generis*)」(Mendelovici, 2014, p. 143) 性質をもつものとして対象を表象するのだと論じられると、MRとFPの違いはほとんどなくなってしまうように思われる。

しかしMRとFPを、存在論的な含意において異なるものとして解釈することもできるかもしれない。FPに与する論者の主張を見てみよう。

色性質がけっして例化されないというのは必然的なことではない。別のミクロ物理的な法則や性質の集まりのもとでは、対象にはじっさい色がありえただろう。そのとき、赤* [引用者註: 経験において表象される赤] と赤 [引用者註: 物理的性質としての赤] はおなじものとなるだろう (Wright, 2003, p. 524)。

色性質は対象の物理的性質とタイプ同一でありえたけれども、現実にはそのようにはなっていない。つまり、色はこの世界ではたまたま例化されていない性質だけれど、対象の物理的性質として意識経験によって表象される別の世界もありえただろう、というわけだ。するとMRとFPの違いは、意識経験において表象される性質がこの世界に実際に例化されているかどうかにかかわることになる。前者は、それを物理的な性質に還元不可能な性質とみなし、この世界のあらたな構成要素として導入する。しかし後者によると、それはこの世界ではたまたま例化されていない性質と述べるべきものなのだ。

この違いは実質的なものなのだろうか⁽⁷⁾。たとえばそうだとすると、なぜ後者の主張ではダメなのだろうか。なぜ、かざられた表象システムをみずからの生存のために活用する生物の行動とどのように結びつくかshidaiで、志向的対象の性質が定まるだけでなく、さらにそれに応じてこの世界の構成要素までもが定まるという、強い主張がな

れるのだろうか。

わたしはFPを擁護しているわけではない。クオリアにかんする志向説と本来的表象の理論からMRがもたらされたことを思いだしてほしい。わたしがいま述べたいのは、そこから実際にもたらされるのはせいぜいFPにすぎないのではないのか、ということだ。さらにすすんで、物理的性質に還元不可能な性質をこの世界の構成要素としてあらたに導入するには、なにかさらなる前提が必要になるように思われるのである。

いまの論点をこう言い直すこともできる。本書の内容に照らしても、FPにはいくつかの批判が可能だろう。たとえば、「意識経験には外界の事物のさまざまな性質が現れているという、きわめて自然で強力な直観」(p. 116) を考えてみよう。本書によると、物理的性質に還元不可能な性質をこの世界に導入しないかぎり、この直観が放棄されるか、物理主義が放棄されるかというジレンマに陥ってしまうとされる (pp. 179-182)。そうなのかもしれない。じっさいFPは、大規模かつ体系的な誤謬を主張するのだから、第一の角に直面することになるだろう。しかし、MRとFPがどちらも、クオリアにかんする志向説と本来的表象の理論からの帰結なのだとすれば、いまの批判がFPに向けられるかぎり、それはひとしくMRにも向けられるはずだ。もしMRがこの批判を避けうるのだとすれば、それは、クオリアにかんする志向説と本来的表象の理論を前提とすることにくわえて、そういった直観を保証するための、物理的性質に還元不可能な性質をこの世界にアドホックなかたちで導入しているからではないのだろうか。

4. おわりに

これまで意識の理論としてのMRの位置づけを検討してきたが、この立場におおきな魅力があることは疑いない。とりわけ、意識経験を本来的表象というアイデアによって包括的かつ体系的に説明しようとする本書の試みは、FPがこれまで特定の領域でしか論じられてこなかったことをふまえると、それよりもはるかに広い射程を有するものであり、本稿で触れることのできなかった含意

は他にもたくさんあるだろう。今後の研究においてそれが明らかにされることを期待したい。

注

- (1) 書評対象の著作は「本書」と表記し、そこからの引用・言及はページ数、脚注番号、ないし章数のみを記した。他の著作からの引用は、著者名、出版年（、ページ数）を記した。また引用に強調表現（ゴチック体、イタリック体）があるばあいには該当箇所に傍点を付した。
- (2) 「相関が成り立つ理由」（p. 261）を説明するという本書のハード・プロブレムの定式化が本当にChalmersによる定式化を捉えているのかという点については、戸田山（2016）を参照されたい。
- (3) 紙幅の関係上くわしく論じることはできないが、意識の表象理論をタイプB物理主義へのオルタナティブとして位置づける本書の区分（たとえばp. 99のフローチャート）にすこし混乱したことを付言しておきたい。というのも、たとえばDavies（2008）が指摘するように、Tye（2000）とJackson（2007）はよく似たヴァージョンの表象理論を展開するにもかかわらず、JacksonがタイプA物理主義をとる一方で、TyeはタイプB物理主義に関与するとされるからだ（Davies, 2008, p. 36）。したがって意識の表象理論とタイプA物理主義（あるいはタイプB物理主義の否定）とのあいだのつながりは、すくなくとも自明なものではなく、それを示すならんかの議論が必要だと思われる。

本書の構成は問題をさらに複雑にする。本書では、まず第2章において、意識概念の特殊性に訴える立場としてタイプB物理主義が特徴づけられる。そしてそれに続いて、第3章で意識の表象理論を紹介するさいには「意識の本性」（p. 61）つまり「われわれはそもそもなにを経験しているのか」（p. 61）という問いへと焦点が移る。このように、タイプB物理主義と意識の表象理論は別々の文脈で導入されていることに注意しよう。したがって「意識の本性」をめぐる文脈のなかでTyeやJackson流の表象理論のオルタナティブとなるのは、タイプ

B物理主義ではなく、「意識経験の現象的性格はその志向的内容によって尽くされることがない」と主張する立場、たとえばクオリア実在論（qualia realism; e.g., Block, 2003）であるはずだ（じっさい、表象理論とクオリア実在論の対立が含意するのは、意識概念というよりむしろ、Jacobson（2015）が指摘するように、意識の神経基盤である）。たしかにこの対立関係は、クオリアにかんする志向説への内在的な批判というかたちで言及されている（たとえばpp. 82–84）が、先の論点をふまえると、それだけでは不十分に思われる。つまり、先に見た表象理論／タイプB物理主義の対比が可能だとして、それが表象理論とクオリア実在論の対立関係とどう交わるかについても、あわせて説明する必要があると思われるのである（本書注33も参照）。

- (4) 「経験の透明性」とは正確にはどのような主張なのか。そしてそれは表象理論をどのようなかたちでサポートするのだろうか。これらの問いについては、依然としてさまざまな考察がなされており、すくなくともここで評者が描写したほど単純に述べるものではない。この点をくわしく検討したものとしては、たとえばStoljar（2004）を参照されたい。
- (5) ただクオリアにかんする志向説と意識の表象理論が本書では区別されることに注意されたい。その区別にもとづくと、意識の表象理論は、クオリアにかんする志向説と自然主義的な表象理論を結びつけることで意識の自然化を目指す立場である（p. 65）。本書で提案されるMRはそのひとつだとされる。
- (6) 投射説が意識の表象理論の文脈においてどのように位置づけられるについては、たとえばChalmers（2004）も参照されたい。
- (7) たとえば感覚や情動がなんらかの評価的な性質を表象するのだとすれば、そのことは、このふたつの主張の違いに重要な意味をもたらすかもしれない。この論点についてFPの立場からは、Seager & Bourget（2007）においてごく簡潔に触れられている。

参考文献

- Block, N. (2003). Mental paint. In M. Hahn (Ed.), *Reflections and replies: Essays on the Philosophy of Tyler Burge* (pp. 165–200). Cambridge, MA: MIT Press.
- Boghossian, P., & Velleman J. (1989). Color as a secondary quality. *Mind*, 98, 81–103.
- Chalmers, D. (1996). *The Conscious Mind*. Oxford: Oxford University Press. [邦訳: デイヴィッド・J・チャルマーズ『意識する心: 脳と心の根本理論を求めて』林一訳、白揚舎、二〇〇一年。]
- (2004). The representational character of experience. In B. Leiter (Ed.), *The Future for Philosophy* (pp. 153–182). Oxford: Oxford University Press.
- Davies, M. (2008). Consciousness and explanation. In L. Weiskrantz & M. Davies (Eds.), *Frontiers of Consciousness* (pp. 1–53). Oxford: Oxford University Press.
- Harman, G. (1990). The intrinsic quality of experience. *Philosophical Perspectives*, 4, pp. 31–52. [邦訳: ギルバート・ハーマン「経験の内在的質」鈴木貴之訳、信原幸弘編『シリーズ心の哲学III 翻訳編』勁草書房、二〇〇四年。]
- Jackson, F. (1982). Epiphenomenal qualia. *Philosophical Quarterly*, 32, 127–136.
- (2007). The knowledge argument, diaphanousness, representationalism. In T. Alter & S. Walter (Eds.), *Phenomenal Concepts and Phenomenal Knowledge: New Essays on Consciousness and Physicalism* (pp.52–64). Oxford: Oxford University Press.
- Jacobson, H. (2015). Phenomenal consciousness, representational content and cognitive access: a missing link between two debates. *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 14, 1021–1035.
- Mendelovici, A. (2014). Pure intentionalism about moods and emotions. In U. Kriegel (Ed.), *Current Controversies in Philosophy of Mind* (pp.135–157). Routledge.
- Seager, W., & Bourget, D. (2007). Representationalism about consciousness. In M. Velmans & S. Schneider (Eds.), *The Blackwell Companion to Consciousness* (pp. 261–276). Wiley-Blackwell.
- Shoemaker, S. (1994). Phenomenal character. *Noûs*, 28, 21–38.
- Stoljar, D. (2004). The Argument from Diaphanousness. In M. Escurdia, R. Stanton & C. Viger (Eds.), *Language, Mind and World: Special Issue of the Canadian Journal of Philosophy* (pp. 341–390). University of Calgary Press.
- Tye, M. (2000). *Consciousness, Color, and Content*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Wright, W. (2003). Projectivist representationalism and color. *Philosophical Psychology*, 16, 515–529.
- 戸田山和久『恐怖の哲学: ホラーで人間を読む』NHK 出版、二〇一六年。